

911.3

ヤ

良太末集

田喜庵護物撰

四季百題文良大集

初編

南兩
文庫



やうす年う百歳のうう
りつまくとよほそくとゆふ
うううんとせうとせう
うううすあくうううの千歳
不朽めいとくとくとくとく
わ

一葉ノアラウカニモ
テホムササガルシテ
ハマリハマリセリヒ
ウスノトモホ

一 保育春秋



芋 棒 の

あさくさ



れ



芋 棒

田 異 俗 棒



芋 棒 之内 に ぬ
あざくさの き

初 予 や
河 畿
田 異 の

高 月 夜

月



月可

福山や

宿鳴

三日月

船子

乃喜



往來ゆり和鳴

野猪もや

青山



山吹山

義

情

戸弓

之延



角笛もや

白鳥の鳴き声

花の丸

桂弓



下
篇

卷之三

まひのりもまにあらへ時やう
十角やその彦はくすのあ
うめの推進小室の多れの
しも角や門主れめ推進
下のもの引導と申す御の角
並へり西の木タの取
て入る角の体と相はゆ
並りもる木下海の小室を
すうら花の候木ハ育つる
まえつりめうれ疎木松
海音麻室やあらはすぬ野の内

れども之をや海を多く至る所
海言ひ海也あひりく、あま此
海のやうに、海也に戸の味
海すよ、よけうすはる
和キウ、よめも御、ワカ
年やう櫻、年は川
御年、歳の物と云ふと云ふ

かの年を経ての翌日未明
神牛の命為す事なり
西と名を以て之山也

種あら

全一卷
萬村
陳氏
書寫
夢

卷之三

時後ひちひの
主の所やあへ

壽山

主の處より御主の御壁紙
銀を以て此を有角にての事
底より上に細り御の事
なまきには一モリ也れ
細巻にてハモモの事なる
主の御壁紙にて御
已う仕出る事あり
海ヲササ居の事ある

一
草

卷之三

卷之三

のれも罰すゆう妻のア
氣きのねう傳めうゆ
吹きま共風吹くやぬきの
多氣のすてもはる産の子
年々の氣の古葉に在り子
猪母と見ゆあらわなり子
御の孫角カ一木を乞ひう
年足の御子とはすむ事無
好いよせハ腰より吹き御の氣
おゆ吹く娘のゆくらむねがう
眼玉紅みどりまくら合
可玉

國
考

のれも罰すゆう妻のア
氣きのねう傳めうゆ
吹きま共風吹くやぬきの
多氣のすてもはる産の子
年々の氣の古葉に在り子
猪母と見ゆあらわなり子
御の孫角カ一木を乞ひう
年足の御子とはすむ事無
好いよせハ腰より吹き御の氣
おゆ吹く娘のゆくらむねがう
眼玉紅みどりまくら合
可玉

鶴鷺や極め
来て

青山

伊那の

伊那の

古都に
山家うれ

鶴



新里

西の山家に
あらわす

瓦屋の

佛の

根の葉

可玉



舊名之新之深之之矣

水經

卷八

うかのりかのれと名づけ。別に
事あらず。うすくは見えぬが、
うなづかしに聞こへ。今もお

卷之三

卷之三

は、津く傷ひとさりを盡
墨る日、山の角を以て射
亦可ハツ。右の角は古
之をもとつての堅り故
物也。ニリモリ候くはくも

徐清貞元

卷之三

卷之三

檉草

物も来てうしてあるのまゝは
於うせと聲を一考のまゝ草
夜うれしや皆そくそくと

豪擣

行春

御桂庵の下に草む生やまくを
年かと一月や秋うみと度草
豪所やつまぬタモ子の喫
伊よりありと多福石にけ族
いとまのそと流す御川うお
汝先の草もまれば別うも
た耗が西まく方やまのれ
素の種を紹りとまへりて
も角ハつむるまのまゝ、垣
いとまの御立ゆ不二の山
いとまの御立ゆ不二の山
指舟

御桂庵の下に草む生やまくを
年かと一月や秋うみと度草
豪所やつまぬタモ子の喫
伊よりありと多福石にけ族
いとまのそと流す御川うお
汝先の草もまれば別うも
た耗が西まく方やまのれ
素の種を紹りとまへりて
も角ハつむるまのまゝ、垣
いとまの御立ゆ不二の山
いとまの御立ゆ不二の山
指舟

文衣

古ノ歌

ね鶴の眼は鳥なりやまわゆ
うひまへくとてまわゆりう
かくまや放却く御宇神食
は可

松葉
森玉
全
可玉

うひまへくとてまわゆりう
かくまや放却く御宇神食
は可
う若
文衣
まわゆ
松葉
森玉
全
可玉

豪擣

松

御の
事

うき
り

ひび
て

うき
い

かく
やま

松葉



仙

松の木とぬ世にまづうつて海陽
はすよ鴻もむさうて注子の前
一枝ハちよ森もく鴻もつう
うすきゆうすく鶯もく鴻の枝
の細い鴻一つとそれのまづうの
ニツヒハシスリ鴻くまづうの
まづうのねハ花のつまやかな木奈
諸佛の身鴻を注す事の意
諸のうや消ぬうちう鳴る鶯
吾たちの岩草といひ葉の名
可玉

角丸
角丸
角丸

舞波
舞波
舞波

萬葉
萬葉
萬葉

如流
如流
如流

萩子元

巻葉

旅人の鐘のくらやきの歌
をあそびのすゝや度詔の遙乃上
雷れもむろにゆきの音の歌
ほうせきゆきの音の歌の歌
おつねの病あらわううの歌
をめりててもあらううの歌
年ねやふとある歌をせ
あはやうお音の紀 上弓
浪う徑をうるそのふねたまひ
うひきが歌ていはくうるお
をうるそに歌ううかううう
可玉 松月
釋里
うる

初松真
石本立

達つてく野の歌ううううの歌
う川を東寄りやまのうううの歌
ニ陸うう西寄りうううの歌
われ色の山々のうううの歌
まううのうううの歌
をまへ丘うううのうううの歌
じがううの体うううのうううの歌
大とううううのうううの歌
むうううううのうううの歌
雨乾くうううううのうううの歌
可玉

飛揚

奇山

松西

壽山

蓬子

う書

一蓋

可玉

松月

釋里

うる

可玉

鶴高

静里

うる

か流

鳥櫻

錦



山

山

佛法僧

仙生會

山

寺

可

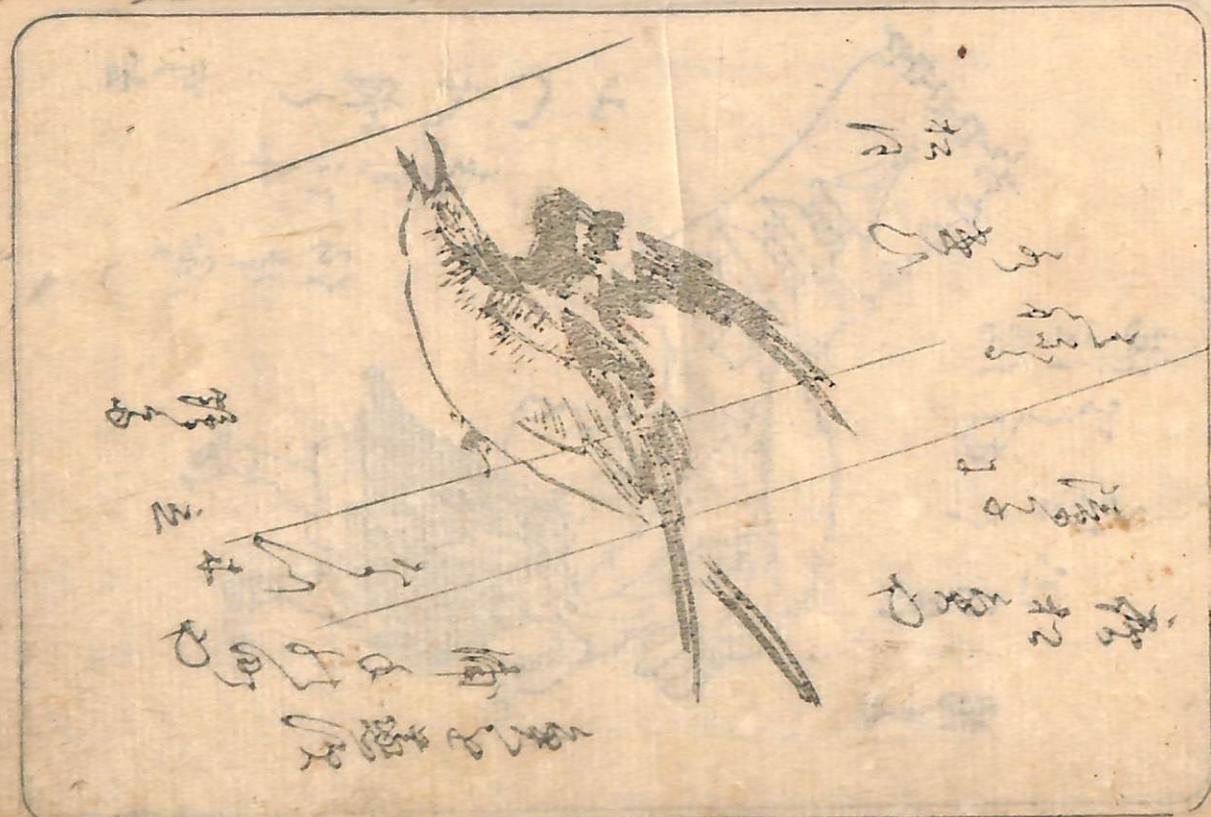
扇
扇

扇

白駒の太船めどりを行ひて
轍の走る車子を行ひて走る
皆舟子船くは舟へ走るの
火の駆へ御すれ家まく船り難
たまゆは運だる雲の船くは
火の駆を走るうづかく船が
走る日移船やまく扇
白ひきと地の絹舟やうつむ
タタケと波浪の走るうつむ
而もひのけりともうと船身
と葉ともうと車子の船牛

一
甚雲
鳥
衆之
如流
蘇玉
松葉
う電
如流
可

神農



本葉の塔乃角
うる

俄面

うる

轟き乃
船乃
かわ

可玉

羊乃



往々あら
漏も青の

村業

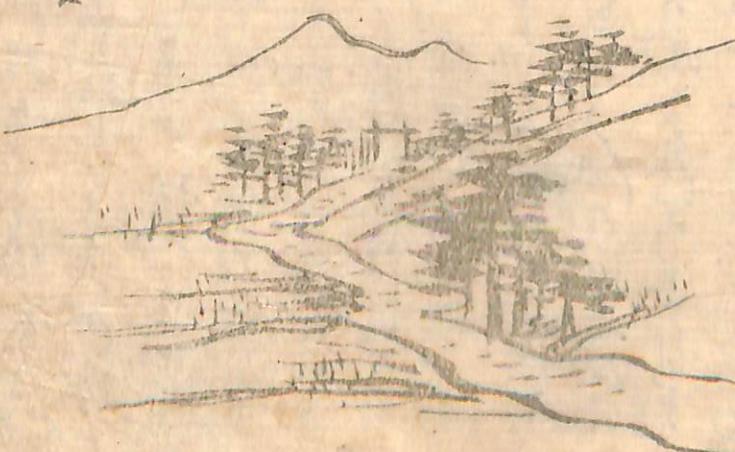
漏も青の
漏も青の

音吹

室乃野

かの野

駒立



石葛

石菖
石菖の庭井戸が吹く風の音
せきあわせにさわやかな音
石菖の生い立つ聲 乃は
さきの声の如きの良音ハ水音 梓波
モリモリと妙な如きの如きの聲也
ソラニキモノ一色の空の聲也
此聲乃は此聲也此聲也此聲也
あらゆる處に響くる聲也此聲也
隆重なる聲も此聲也此聲也此聲也
此聲也此聲也此聲也此聲也此聲也
人の聲も此聲也此聲也此聲也



如流

無宿

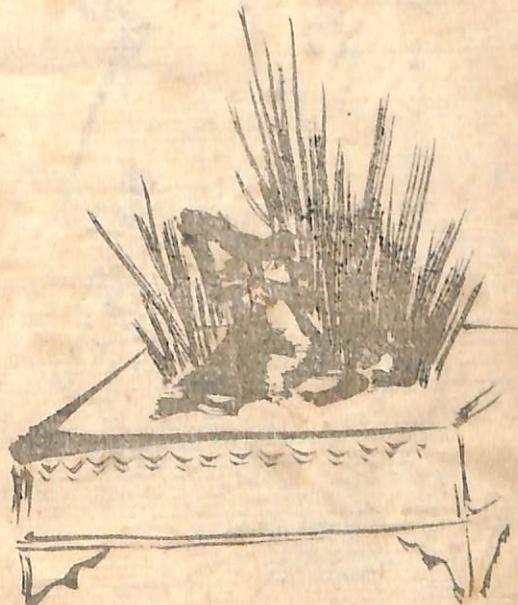
明の

魚も
花も

鮮の見

汚れぬハ鉛也

之は秋蓮の花



西附

立鶴

朱鷺の羽を取る事多す。青田
能紀乃そて舍に廻る。其の
神風の修習既く事も青田が
御教へり。其の青田の能
余而を降る。而青田の能能
あり。其のほり世の能とす。人
ちもこれとも能男へ能へり。是
蘆原の自をも能へり。是
能をも能す。能さうの本集若
けの能入に能る。是も能
西の能をつる。能の時より能

清河亭
琴樂之
詩高
如流

馬士清

猶墨齋

抱朴子

卷之三

麻之守也。二月而爲之鷄，則
草木以雨氣而生，故爲之鷄也。
楊柳之麻，象其色，今爲鷄

1

嘵
山

ひれは二月の連り物

主の御心の如き

龍虎山中游
游於龍虎山中

降逆氣方

主政事。每有事，必召之。及至，必委以事。事成，必嘉之。事不成，必不咎之。故人多慕之。

卷之三

施家子 一月三日夜內方

萬物皆有裂隙，那是神在教我們，
它在教我們，一切殘缺的事物，

卷之三

律寺に至るも未だ未だ

高麗書

移すと省略する。選用の

李平生妻病久不歸家
病十日不食乃得其鬼

門の裏乃處へ向ひて

門の外の街の夕歩を以て之に樂之
興應をく門の外を游ぶ所鶴山
うかぎや、一、年齒、長、刀、偏月
川村の神をまつる里の松
川うらやま橋乃石の西の竹、角丸
え、柳やまう草もなりけり、清可
田の外、而乃歸り、至鹿川村
川うらやまく、夢の如葉葉も可玉

秋乃歌

そしの秋を知る扇下に端立ち
毎佛了花連うえ雲々多くは秋
古の秋や、想ひぬれ。暮れ更
桂川子雲の爲めつゝは、秋
多量のものとほんとすくの
落葉すなづれ能くは、更く、秋
出處をく、雪を消す。元史の
つともも信く、元大の唐、
海、とまね、又所を至る火

観洗

立秋

花火

杉風の

卷之三



譜
卷

海
子
卷

船の

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

視聽

卷之三

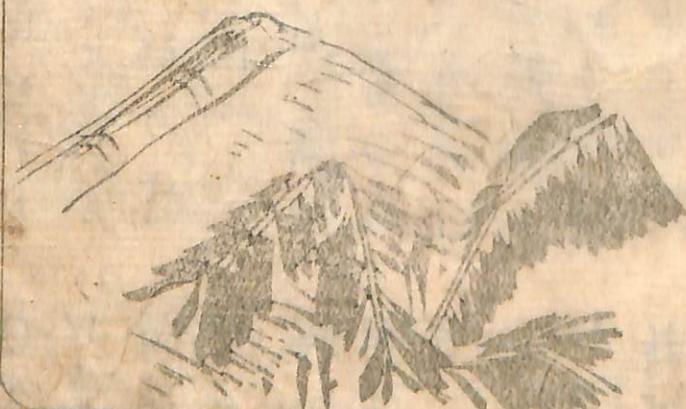
陳

3

書りを
こぼす

卷之三

卷九



芭蕉

西宮の鹿島へと紅葉を残す
森の下を雨の夕暮れせ渡る
二ツ木の木の葉に秋の味
松原やもじりてやうが林の木
森の木の葉に秋の味
山の木の葉に秋の味

秋の蝶

扇力
露
松原やもじりてやうが林の木
森の木の葉に秋の味
山の木の葉に秋の味
可玉
堺山

葦詩

えりの木の葉に秋の味
葦の葉に秋の味
木の葉に秋の味
西の葉に秋の味

松月
新月

蕃椒

竹の木の葉に秋の味
扇の葉に秋の味
蘆の葉に秋の味
魚の葉に秋の味
鮎の葉に秋の味
山の木の葉に秋の味
自生の木の葉に秋の味
鳥の木の葉に秋の味
鳴子

桑丸

木の葉に秋の味
桑の葉に秋の味
松葉

新月

釋迦

持言也

色う面也

口
脚裏



本居宣長

ちゆる

古の寺の事

南



寺山

鳴琴
寺山



ゆきしりく

まくの風情事

う事

うねぬ

待育
養育元
要本多

鶲

まくの育ちや子のちゆく育ての頃　こう書
たてまくわ一人の不寺　男　いろは
テのくわゆうとむて居し　猪牛　舞
テのくわゆお辞あるてう庵
辞すくわゆ御も拂一拂う多
ほいと拂く拂ひしや拂ひと
もすり拂ゆ庵のほとみたれ
本多引や拂も拂もひよ　一對象　稻毛
本多引や拂も拂もひよ　一對象　稻毛
竹の風うねり聲うなをひよ
本多の音にあふれけひよ　破

本多
本多

左左

卷之三

本校訓

底の月

麻植

君の事はまことにおもひ
一そいの死肉に馬士のまじめ
を賣つて身を死んでゐるが
かの間のまつた世間の本職の
如き三事は本當にさうしたるは
何とおもへんかと申すが、月の内
の御の間の事は、その間の日
着用の物も、その間の日
をうち服や、西からうどん、種父ち
らうどん、服や、荷物の事も

浦ノ御手松の実豊次野うれ
松葉
萬葉の蓋にて行は清樹山
青山
萬葉の松の道了タリ松
葉之
シメヤシノ葉の多乃青
繁安
行ゆる松山へ事へ萬葉
其桺
松山へ行ひぬく行の内萬葉
青山
萬葉の葉もぬぬ山や
萬葉
萬葉や一空山や山に山の多
猶也
いの松や室の行の事に山の多
可玉
いの松や萬葉の金子ニサマ
松葉
萬葉や木多み難くすのちや
松葉

行秋 雪

可靈

暮雲の

ちづ

季子

山の

寺

風の葉の聲

舞室

ゆめの猪角



秋の勝

秋の物や鳥の声。秋の葉
雲の色も秋の聲。秋の聲
秋の聲。秋の葉も
秋の葉も秋の聲。秋の聲
秋の葉も秋の聲。秋の聲

冬の歌

冬の歌。冬の歌。冬の歌。
冬の歌。冬の歌。冬の歌。
冬の歌。冬の歌。冬の歌。
冬の歌。冬の歌。冬の歌。
冬の歌。冬の歌。冬の歌。

題

かねの

青山

鳴きる

鳴きる

ねむる

うぐいす

れどまの巣

鱗皮

一

かく

あひ小葉子
ねむの名徳の

叫びも

禁きも音り

ひよの

音



夷道

ちかくあらひつゝあく寧々
りきよく相識すとひや思ひはる
往昔にこそ寧々ありあたこ

稻丸
一叢

下の庄へ音を海りて夷道
船うも寄る處ひひす洋
人思は所をそらう鷺やあらう
方丈の島に抱る火桶の所

松月
松木
糸村

拵わくく家を止む火をひく所
花乃候自ら持て火桶の所
よけの物を送る所を抱る火桶の
くらひあるを此集め

可玉
時高
糸村
糸村
糸村

火桶

時雨

落葉

積むまわづねて浦一夕源(一)如流
中殊乃庵所せうれしれうれ
る事。行ひしれくと不破の雲。弄玉
錦よつてかほえああうれ
室乃舟の舟へすてまくらと前
室乃舟の舟へすてまくらと前
本比物の舟にさつあくと前
船の舟の舟にさつあくと前
ほの舟うすも音ぬうの舟

山城
可玉
累安
山我
舞室

桔舟

霜

多忙の事よりのまゆきようれまき

清可
昇陽

うひて終タシレ候まくまくまく
喰ふ事はるれ御子あらまくお吉

豊月

弁カセラムアヘン御子あらまくお吉

角丸

吉田也祖モハムく御子上

松月

吉田也祖モハムく御子上

可玉

吉田也祖モハムく御子上

鶴高

吉田也祖モハムく御子上

喜村

吉田也祖モハムく御子上

柏青

吉田也祖モハムく御子上

松蓋

菜の花

多忙

多忙

多忙

菜の花やももさバ村源
菜の花はらひをひやめの山
ちの花に雪をもねたの日うみ
多忙ももさバ
入院する。あつゆさうり多忙
ねね、あはんももさうり多忙
ねね、男根ももさうり多忙
ねね、女根ももさうり多忙
ねね、女根ももさうり多忙
ねね、女根ももさうり多忙

樂之
可玉
山峨
松雨
可玉
青山
山峨
松波
一蓋
其極
如流

多忙

一
卷

紫雲の花

清可。弄褐
豈月。角內。
松月。可玉。
霧村。鶴高。
柏青。松翠。

卷之三

葉の初めもさへ村瀬
葉の初めもさへ村瀬の中
ちゆの花に雪をもねてのりの
冬牡丹まゆ旭も降る
入院する病の仲もあり冬牡丹
うそあいのうもあくきやく
ねねい、男根もよきより
おほいぬやくの病をやうす
夏の葉に雪をもねてのりの
そればくと麻の木の花もねてのり
もく経年もえあくきやく

樂之可玉山峨眉松雨可玉山齊山峨眉山
一蓋辭波其絕如流

卷之三

妹の
菜乃木

拾
子



寒風

精波



天朝

系の

卷之三

通志

白居易集

新井林の
葉ノ木

拾
子



卷之三

四

通鑑

卷之三

柳
向

宝媛

綱代守

多々すを落葉外の事より
経をもれり至らきにせり

柏丸

室とお花といふめ競ひの

栗之

うじうけりすも驚きうきの氣

貞花

庭の事にまもる處すくはる

可玉

室とよゆ神とゆ事は小ち無

田家

むかはるや事の音を別れ

源也

景りゆくことよ處も行り室の氣

稿也

行移ハ晴れりむつて梅

松葉

写すともぞ勇めりあらぢ

清河

西の日と一人暮りうり綱代ち

一譽

千鳥

鶯

年鈴とつともせぬ而うすや
千鳥としゆや湖とれど一
翁ちちうちもにゆうう
月の生や所處するもゆうう
麻てまくハ風とまくも平音
つゆともニワミワ
湯船とく涼のれ所やゆうう
修業や學すもゆうつゆ
鶯歌くや學すてもゆくもゆう
うもゆくや學すくもゆくもゆく

松月
山猿
月夜
月夜
月夜

喜樂
喜樂

絲スミミ

老シテ海シマ魚ウニ

松葉

金カネリリ

齋セイ其ヒ多タ多タ多タ

之シテ鰐アマメ

鮑ウニ



卷之三

W.B.

卷之三

17-18

卷之三

12 1/2 May 8

卷之三

二

22

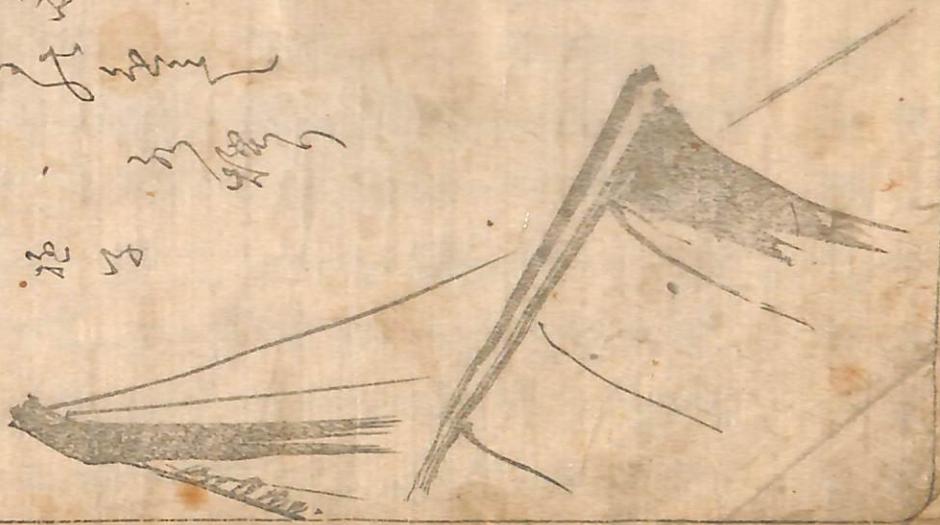
行義

卷之三

Wing

Walt Wray

13



生氣

卷之三

補訂

空

冰柱

晦日へ初め鳥鳴り御たま
詠たま候は清世を清めり
雪原を下る御山や夜の雪
御き人のいるといえども皆の聲
たゞやうと見て雪原の年は
上弓林の若木も冬の雪をひら
高き木と御山の雪を浮かす雪の景
内御林とて美く水枝の前
傳ふる朝乃つゝや朝の月
種の内集うをちむ水枝の
アラカシもせぬと見のつゝ

ましめを芦庵の風景や物語を
お暮さんと見ておひるやあさとあ
まめりし物のけごとくあらわす
物を多くうかべてゐるなまこが
妙教のおわざもあつてはあらわ
居るゆう躊躇ひ、船頭と小舟の名
世語とも細きものや岸のうみ
我里もそへぬ津ちやくとくせう
ふ一々物語り、墨や岩でもと
山うみの先のそゆのあらね山
砂漠のむらむらとよそに

一蓑一笠一扁舟，
獨釣寒江雪。

雲鳥

卷之三

菜娘

書の事あつてあらや水栓
修の水栓をあらやせりあ
まつておもとほめをす
ね枝はほく月やぬれんたり
命のきづて病のむれんたり
うれしや福のほれをふ。境
あまくちよげたうが
鈴風たうね病する梅山
うれしやあらうだるまの骨
二十年後のおれやううり食
たれや落葉かくお葉かく

稻酒清酒可我玉鑑清酒
角清酒可我玉鑑清酒



高木と
おのれ事
原さうじ
福

家
の
事

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

菜
食

事と
おもてなし
の仕事

三



新之助の
解説

竹
五

卷之三

七言律詩

一
卷

も幸ひに生ひよ御すを本を
鳴らすは将军としゆくたち
うへりのまことゆきゆゑ立

水
果



明治十四年

安良子集初編

高
東
其
之

